

# ギヤスケルとブロンテのクィアな瞬間と手紙

大田 美和

## 1 手紙の操作と異性愛規範

これまでの研究が明らかにしているように、エリザベス・ギヤスケルは『シャーロット・ブロンテの生涯』（以下『生涯』）において、死後、誤解や中傷的になったブロンテの名誉を回復するために、ブロンテが小説『ジェイン・エア』から世間が想像するのは異なり、自己犠牲に生きた女らしい女性だったことを証明しようとして、『生涯』に載せる手紙を取捨選択し、手紙の配置や紹介のしかたなど様々な工夫や加工を行った。ギヤスケルはブロンテを偉大な「女性」作家として描き出すために、実人生とは異なるプロットを捏造したのである。

たとえば、ギヤスケルは、『生涯』の中で、1851年にブロンテが求婚に応じるか迷っていたスミス・エルダー社の社員で彼女とほぼ同い年のジェイムズ・テイラーの2通の手紙のうち、1通を慎ましい処女をめぐる求婚のプロットに利用し、もう1通を道徳的に疑わしい情熱に対して怖れを感じつつ、それを虚構の世界で描き出す力を秘めた女性作家を構築するのに利用している。

ギヤスケルはまず、『生涯』の第23章で、テイラーに対する気持を明かした親友エレン・ナッシー宛の1851年4月9日付の手紙（Smith 2:599）を、ブロンテが情熱とは無縁であった例として引用し、求婚を3度断った時も4度目に受け入れた時も平常心であった、と賞賛している。それは、ブロンテ神話の形成過程をたどったミラーの言葉を使えば、“sexless”（Miller 69）あるいは“passion-free”（Miller 70）なブロンテの構築ということになる。

I shall now make an extract from one of her letters, which is purposely displaced as to time. <sup>1</sup> I quote it because it relates to a third offer of marriage which she had, and because I find that some are apt to imagine, from the extraordinary power with which she represented the passion of love in her novels, that she herself was easily

susceptible of it.

“Could I ever feel enough for—To accept of him as a husband? Friendship—gratitude—esteem—I have; but each moment he came near me, and that I could see his eyes fastened on me, my veins ran ice. Now that he is away, I feel far more gently towards him; it is only close by that I grow rigid, stiffening with a strange mixture of apprehension and anger, which nothing softens but his retreat, and a perfect subduing of his manner . . .” (*Life* 306) (下線引用者)

そして、『生涯』の次の章（第 24 章）では、テイラーに対するブロンテの感情の別の一面を伝えかねない手紙（1851 年 11 月 15 日付）（*Smith* 2: 717）をテイラーの名をわざと伏せて差出人は「遠方の友人」だとしている。

I find a letter to a distant friend, written about this time, a retrospect of her visit to London. It is too ample to be considered as a mere repetition of what she had said before; and, besides, it shows that her first impressions of what she saw and heard were not crude and transitory, but stood the tests of time and afterthought.

.....

“Rachel’s acting transfixed me with wonder, enchained me with interest, and thrilled me with horror. The tremendous force with which she expresses the very worst passions in their strongest essence forms an exhibition as exciting as the bull-fights of Spain, and the gladiatorial combats of old Rome, and (it seemed to me) not one whit more moral than these poisoned stimulants to popular ferocity. It is scarcely human nature that she shows you: it is something wilder and worse; the feelings and fury of a fiend. The great gift of genius she undoubtedly has; but, I fear, she rather abuses it than turns it to good account . . .” (*Life* 321-22) (下線引用者)

この手紙は、ロンドンの劇場で見た女優レイチェルの演技の印象を伝えている。この体験はすでに同年 6 月に友人のアミーリア・テイラー、親友エレン・ナッシー、後輩作家シドニー・ドウベルへの手紙でも書かれているが、ジェイムズ・テイラー宛の手紙の描写が一番長く、後にこの経験が生かされた『ヴィレット』の女優ワ

シテの描写に近い。テイラーはブロンテにとって芸術的な感動を伝えたい最良の読者であり、感動を分かち合える人という信頼で結ばれている相手なのだ。

ここで論者は、ブロンテはテイラーを憎からず想っていたと主張したいのではない。ここからブロンテの交流関係を別の視点で見るときっかけを得たいのだ。整理してみると、この二人の関係は、厳格な異性愛規範から見ると、肉体的な嫌悪を感じるから恋愛も結婚も考えられない（Miller 70）関係なのだが、書簡からうかがわれるのは、共通の関心事についての親密な心の交流である。そしてその交流の密度はエロティックと呼べるほどに濃く、当事者さえ時にはそれを結婚が前提となる異性愛かと疑うほどのものなのだ。

さらに付け加えると、1851年のブロンテの他の手紙を『生涯』の操作なしに読むと、この年、ブロンテは二人の異性と結婚の可能性を秘めた交際を文通という形で行っていたことがわかる。彼女は、8歳年下のスミス・エルダー社の社長スミスとも親しい文通をしており、同年1月30日付けのナッシー宛の手紙では、テイラーよりもスミスとの縁談のほうがありえるかもしれないと認めている。

ブロンテ神話の解明をめざすミラーがテイラーとの関係を軽視したのは、ブロンテが異性愛者であり、異性愛規範に沿って行動することを自明とする思い込みにも原因がある。ここで論者が異性愛規範と呼ぶのは、フェミニズムが明らかにした、女性は男性と異なり一人の男性のみを愛すべき（はず）だという、女性に科せられた近代的な愛の二重規範であるだけではなく、肉体的な嫌悪を感じるなら親密な感情も持っていないはずだという、セクシュアリティをめぐる「常識」でもある。ブロンテは明らかに異性愛者であるにもかかわらず、ヴィクトリア朝社会、否、異性愛が正常とされる社会の異性愛規範を逸脱する瞬間を持っているのだ。この異性愛規範を逸脱する瞬間を「クィアな瞬間」と呼ぶことにしよう。

「クィア」（“queer”）とはゲイと同義ではない。「クィア」は多様なアイデンティティを具体的に記述するのみならず、異性愛体制の外部にある全てを包括する用語として構想された（ベネット 439）。クィア理論の実践はゲイやレズビアンへの権利を求める運動と同じく、多様なセクシュアリティを認める社会の実現をめざすが、クィア理論は、同性愛者が差別されるのはセクシュアリティの違いだけではなく、行動様式などセクシュアリティ以外の違いにもよるためと考えるため、クィア理論の分析対象は異性愛の性指向を持つ主体にも適応される。フェミニ

ズム批評やジェンダー論とは微妙に異なり、新しいパースペクティブを開く方法としてクィアな視点を利用したい。

## 2 ブロンテとルーシー・スノーの厄介な問題——男たちとの非規範的な交流

処女の性欲が規範からの逸脱とみなされた時代に、『ジェイン・エア』以上に問題視されたのはおそらく『ヴィレット』であろう。ブロンテを高く評価した作家でさえ、この小説のヒロインに対する嫌悪感を公的な場でも私的な場でも明らかにしている。ルーシー・スノーの二人の男に対する愛の是認は、サッカレーやハリエット・マーティノーやマシュー・アーノルドらの批判的になった。

まず、『ヴィレット』の問題の場面の叙述を見ておこう。この時点でルーシーはジョン・グレーム・ブレトンへの愛をあきらめて、ポール・エマニュエルを愛しているが、彼は友人たちの奸計で西インド諸島への派遣が決まり、彼女はアヘンを飲まされて眠らされる。しかし、敵の目論見とは逆に興奮した彼女は、夜祭りに賑わう街に出て行く。そして木の間からひそかに知人たちを観察するうちに、グレームは彼女のために気づかぬふりをしていると思い、彼の配慮に感謝する。

Graham's thoughts of me were not entirely those of a frozen indifference, after all. . . . he proved to me that he kept one little closet, over the door of which was written "Lucy's Room." I kept a place for him, too—a place of which I never took the measure, either by rule or compass: I think it was like the tent of Peri-Banou. All my life long I carried it folded in the hollow of my hand—yet, released from that hold and constriction, I know not but its innate capacity for expanse might have magnified it into a tabernacle for a host. (*Villette* 661-62)

麻薬の効果で彩られた異国の夜祭りの場面で表明される、当時の異性愛規範からすれば尋常ならざる愛は、『アラビアン・ナイト』のペリ・バヌウのテントの喩えによって夢幻的な雰囲気を帯びている。ジョージ・エリオットが“I am only just returned to a sense of the real world about me, for I have been reading *Villette*, a still more wonderful book than *Jane Eyre*. There is something almost preternatural in its power . . .” (Allott 192) と絶賛したのは、この場面を想起してのことだろう。

エリオットとは異なり、サッカレーやマーティノーやアーノルドは、この場面の叙述の夢幻性よりも、叙述の内容がはらむ性愛の問題ないしは道徳的問題に注意を向けた。サッカレーはルーシー・バクスター宛の手紙で“*And it amuses me to read the author’s naïve confession of being in love with 2 [sic.] men at the same time; and her readiness to fall in love at any time.*” (Allott 197) と述べ、この器量にも持参金にも恵まれない天才女性作家は何よりも相思相愛の男を欲していると揶揄している。母親宛の手紙にも“*... Villette is rather vulgar—I don’t make my good women ready to fall in love with two men at once, and Miss Brontë would be very angry with me and cry fie if I did.*” (Allott 198) と述べて、二人の男への愛の表明を俗悪とした。

マーティノーは『ヴィレット』の書評で“*the uncomfortable impression of her having, either entertained a double love, or allowed one to supersede another without notification of the transition*” (Allott 172-73) と表現してブロンテを激怒させ、以後二人は絶交した。アーノルドが手紙でこの小説には“*hunger, rebellion and rage*”が充満していると言って嫌悪感を示した (Allott 201) のも、この文脈で考えられる。さらに、ギャスケルもルーシーは好きになれないとブロンテに直接言ったと手紙で友人に伝えている (Chapple and Pollard 249)。

そもそもブロンテは「アングリヤ」ではアモラルな愛憎劇を描き、『ジェイン・エア』でも妻ある男性への愛を描いているし、現実には、ベルギー留学時代と帰国後にエジェ先生という妻子ある男性への片思いに苦しんだ。ギャスケルの『生涯』ではこの恋を隠蔽し、時間の操作を行って、彼女の苦悩の原因を弟ブランウェルの墮落と説明したのは周知の事実である。

さらに、すでに述べたように、『ヴィレット』で批判された二人の男性への同時的な愛は、現実にも進行していた。ブロンテをめぐる男たちのうち、スミス・エルダー社の社長ジョージ・スミスは『生涯』の出版元であるため、ギャスケルは二人の関係をありのままに描けなかったし、彼もギャスケルには手紙の一部しか見せなかった (Barker 784)。ギャスケルの操作の結果、『生涯』から失われたブロンテのユーモラスな一面や痛烈な一面 (Uglow 545) を伝える手紙の中には、たとえば、出版社の人々の性格の違いを、輸出用のボンネットを選ぶ作業にたとえて想像したスミス宛の手紙 (1849年12月26日付) (Smith 2:317-18) がある。

I think if a good fairy were to offer me the choice of a gift, I would say—grant me the power to walk invisible; though certainly I would add—accompany it by the grace never to abuse the privilege. And I would not count it an abuse to watch the proceedings of gentlemen commissioned to make a selection of ladies' bonnets for East-Indian exportation. (Smith 2: 317)

『シャーリー』の未掲載の序文(書評でブロンテを侮辱したエリザベス・リグビー宛の手紙という形式)にも絶妙のユーモアとアイロニーが躍動している。

In the second place, you <ann> breathe a suspicion that Currer Bell, “for some sufficient reason” (Ah! Madam:

“Skilled by a touch to deepen Scandal’s tints

With all the kind mendacity of hints.”

“for some sufficient reason” has long forfeited the society of your sex. In this passage—Madame—we discover an undoubted Mare’s nest: here is the cracked shell of the equine egg: there the colt making its escape [a toutes jambs] and alas!

(*Shirley*: Appendix C: 802)

この2つの手紙文のうち、後者は初期アングリヤ物語の語り手チャールズ・ウェルズリー(タウンゼント)のアイロニカルな文体に近い。これはブロンテが「大人の」作家になる時に抑圧した別の声、非規範的な声である。『生涯』はブロンテの初期作品を軽視すると同時に、非規範的な声を抹消しているのである。

より重要な問題が明らかになるのは、スミス・エルダー社で40人の部下を指揮し、のちにインド支社を任されたジェイムズ・テイラーとの関係を『生涯』と『書簡集』で読み比べた時である。彼は『ジェイン・エア』の真価の第一発見者だが、ブロンテの最初のロンドン訪問時には印象に残らず(Smith2: 239)、彼が選んだ本や雑誌に手紙を添えてハワースに送って文通が始まったらしい。彼は1849年9月に『シャーリー』の原稿を取りにハワースを訪問した。次に彼が社用で訪問したのは、1851年4月頃である。その時明確な求婚はされなかったが、余人に代え難い人事のためやむなくインドに行くという説明や、文通の継続の懇

願や出発前にもう一度会えないかという訴えが意味するものをブロンテは理解していた。

文通が途絶えた時ブロンテはショックで体調を崩す (Smith 3:57) が、自分から文通を復活しなかった。多くの批評家はブロンテが親友宛の手紙の中で性的嫌悪感を明言しているから、この男との関係を『生涯』で処理するのは簡単だった (Miller 70) というが、それは単純すぎるだろう。残された手紙から読み取れるのは、反発や嫌悪感が、文学や芸術について語り合える喜びと混在したアンビバレントな感情である。ギヤスケルが『生涯』の資料を集めていた時、テイラーはイギリスにおり、ブロンテからの手紙をギヤスケルに見せている。このように、作品でも実人生でもヴィクトリア朝社会の異性愛規範を逸脱する経験を持っていたブロンテを、偉大な「女性」作家として構築するためには、ブロンテと男たちの交流を伝記の中でどう扱うかという問題は、一番厄介な問題であったにちがいない。

### 3 ルーシー・スノーと手紙、記憶とのクリアな付き合い方

近年、時間や場所や記憶についてのクリアな認識についての研究が進んだ結果、多数派から「不健全な」ものとしてマイナス評価されていたクリアな認識を、社会の周縁に置かれたマイノリティがエンパワーメントする機会となるものとして、積極的に評価できるようになった。これを可能にしたのは、ジュディス・ハルバースタムの時間と空間に対するクリアな認識についての理論である。ハルバースタムは、クリアな主体は空間と時間を、発展、成熟、大人、責任といった慣習的な論理に異議申し立てを行うような方法で、空間と時間を使うとする (Halberstam 1-21)。この理論を応用した興味深い読解がジェイン・オースティンの『説得』について行われている。その読解では、アン・エリオットは同性愛の欲望を経験するからではなく、自らに快楽を与え、自分の精神と身体を現在の瞬間に拘束することを拒否するというクリアな形を取ることで、セクシュアリティの平等を阻む異性愛規範に挑戦するということになる (Kozaczka 7-8)。

『ヴィレット』のルーシー・スノーと手紙や記憶との付き合い方はクリアな認識の好例である。孤独なルーシーは、幼なじみの医師ジョン・グレアムの親切な手紙に精神的に支えられるが、情熱的な返事と冷静な返事を書き、後者を送る。

その後手紙が盗み読みされることに気づいて、手紙を埋葬の儀式をするようにして庭の古木の根元に埋めるが、手紙は完全に忘れられたわけではない。

Was this feeling dead? I do not know, but it was buried. Sometimes I thought the tomb unquiet, and dreamed strangely of disturbed earth, and of hair, still golden and living, obtruded through coffin-chinks . . . (*Villette* 525)

手紙のみならず、グレアムの発した言葉さえ、ルーシーの生涯を通じて反芻されたことが示唆される (*Villette* 354)。過去は過去として切り捨てて未来へ前進するのが「正しい」生き方である立場から見れば、舌なめずりするように過去の言葉を反芻し、過去と現在の間を行き来するのは、異性と正面から対峙せず、マスターベーションで欲望を解消するような、「不健全な」生き方である。クィア理論はこのようなオートエロティックな生き方の真価を再検討し再評価する。

ルーシーに対するサッカレーたちの嫌悪感は、彼女の後ろ向きでオートエロティックな欲望の解消方法にあったと考えてもよいだろう。手紙に固執してヒステリーを起こす彼女にグレアムが「幸福を育てなさい」と助言すると、彼女は「幸福はじゃがいもではない」と反発する (358)。ルーシーは同性愛者ではないが、社会の周縁にあって多数派から「おぞましい」とみなされ、自らの生存権のために苦闘する姿は、同性愛者が異性愛体制に対して苦闘する姿と変わらない。

既に述べたように、ギヤスケルも他の作家と同様に、ブロンテのクィアな瞬間に抵抗を示したが、たとえばギヤスケルの『北と南』も、結婚小説をクィアした小説として読むと、より生産的で挑発的なテキストとして読むことができる。実はギヤスケルこそブロンテ以上に異性愛規範から逸脱した瞬間を持つ作家である。『北と南』のクィア・リーディングは別の機会に譲るとして、以下、ギヤスケルとブロンテのクィアな瞬間を検討してみよう。

#### 4 ギヤスケルとブロンテのクィアな瞬間

ギヤスケルもブロンテも女同士の絆や異性装などの非規範的な方法で、父権社会の中で抑圧される女性や労働者の抱える問題の解決を探ろうとしている。ギヤスケルとブロンテの規範に沿っている瞬間と、規範から逸脱した瞬間をマッピング

グしてみよう。たとえば、作品中の異性装やホモエロティックな関係について、ギヤスケルでは『メアリ・バートン』のジェニングスや『克蘭フォード』のピーターの女装、メイドが男装して女主人との関係を夫婦と偽って主人の暴力から逃れる「灰色の女」のアンナとアマントゥがいる。ブロンテでは、『シャーリー』のシャーリーとキャロラインの関係、『ヴィレット』のルーシーの男装、有能で非情な女校長マダム・ベックとルーシーの関係、ルーシーとジネヴラとの嗜好品や恋人を分かち合う関係がある。

死後、再評価の始まる 1990 年代までの模範的な家庭婦人というイメージとは裏腹なギヤスケルの実像も、異性愛規範を逸脱している。彼女はユニテリアンの牧師の妻としての務めを果たしてはいたが、子どもや夫がいても自分のやりたいことを自分の稼いだ金で実現した。取材と気分転換を兼ねた外国旅行はもちろん、老後の別荘を出版社から原稿料前借りの形で購入さえした。ディケンズと対等にビジネスの交渉をして、彼が「私がギヤスケル氏だったらお仕置きしてやるのに」(Hopkins 152) と友人宛の手紙に書いたことは、女や子どもの懲戒権が夫や父親に委ねられた時代に、彼女の行動が異性愛規範から逸脱していたことを示す。

さらに文通と言うことでも、ギヤスケルには当時の異性愛規範を逸脱した瞬間が見られる。彼女は晩年の 10 年間婚外の 17 歳年下の異性との文通を楽しんでいた。1850 年にロンドンで知り合い、1857 年に旅行先のローマで再会した米国人ユニテリアンの学者チャールズ・エリオット・ノートンとの文通である。

1932 年に出版された 2 人の往復書簡集は合計 42 通の手紙を収録している。ギヤスケルが初めてのオックスフォード訪問の感想を伝える手紙は、「私は中世的であって、マンチェスター的でもアメリカ的でもないの。花がいい匂いをさせて、鳥がさえずる世界が私は好き。王様と女王様、ナイティンゲールとモクセイソウとバラが好き」(Whitehill 16) と少女のようにあどけない。さらに、ロシアの少女ファンとの文通の楽しさを「気の合わない知人より気の合う未知の人とのほうが打ち解けることができる」(Whitehill 28) と意味深長なことを述べたり、『『アダム・ビード』や『牧師館物語』とりわけ「ジャネットの悔恨」のような本があるのに、書く努力をする価値があるとは思えない」(Whitehill 39) と弱音を吐いたり、多様な側面を見せる。一方ノートンは、1860 年初めにギヤスケル一家の誕生日を教えてほしいと書き、「ローマでお会いしてからもう 3 年になるのです

ね！」とため息のような追伸を書く。その四か月後にも「写真をお送り下さるのは嬉しいですが、そっくりでないと困ります。見慣れないお顔と記憶の中のお顔を重ねたくはありません。記憶の中のイメージを再びお会いする時まで変わらずに保っておきたいのです」(Whitehill 57-58)と愛の深さを伝えている。

ノートンがただの色男ではないことは、画家をめざすミータの将来についての相談に、ラスキンの絵に言及しながら丁寧に答えるところからもわかる。信頼できる相手だからこそ、ギャスケルは画家でフェミニストのバーバラ・リー＝スミス・ボディションへの複雑な思いを語ったり (Whitehill 51-52)、女中の婚約者の事故を短編小説のように語ったり (Whitehill 65-66) したし、ノートンもロングフェロー夫人の悲しい事故死の顛末を心をこめて語ったのだ (Whitehill 88-89)。

この文通は双方の家族公認であり、多忙なギャスケルが娘たちに代筆を頼むことも多く、彼女は彼に「恋をしたというのは、少し言い過ぎかもしれない」(Uglow 418) が、思い出の地ローマとアメリカの魅力<sup>2</sup>を差し引いても、この文通の親密さは特別である。彼女は彼を「女性を最もよく理解する男性であるだけでなく、男同士の友情とともに良き女性との心のこもった交友も必要とする」(Whitehill 98) 人として称えている。この文通の中でギャスケル氏が、家長としての責任を伴う家族旅行より気楽な、兄弟や男友達との旅行に嬉しそうに出かける姿が見られるのも面白い。手紙にはクィアな瞬間が痕跡を残しているのだ。

対照的に、ブロンテは結婚を機に異性との文通を断っている。彼女は婚姻継承財産設定を行い、夫からの経済的独立を図ったが、精神的独立は難しかったように思われる。この印象は 1852 年から 55 年のマーガレット・スミス編の書簡集や中岡洋・芦澤久江編の『シャーロット・ブロンテ書簡全集／註解』を年代順に読むと裏付けられる。この時期、作家カラー・ベルの終わりの始まりが起こっている。テイラーの沈黙に続き、スミスの沈黙と婚約発表により彼ら 2 人との文通が終わると、彼女は 16 歳年上の良き理解者でスミス・エルダー社の出版顧問ウィリアム・スミス・ウィリアムズ氏との文通にも自主的に終止符を打つ。この時期、副牧師アーサー・ベル・ニコルズの求婚とブロンテの拒絶、父の怒りとニコルズの辞職、ギャスケルらの仲人による密かな交際という新しい事態の進展もあった。ブロンテは異性愛規範に則って、クィアな瞬間を作り出す関係を整理したのだ。

ここから、ギャスケルが『生涯』で構築する以前に、ブロンテ自身が良き妻、

良き娘であり作家でもある女性像を自ら構築する意志があったことがわかる。『生涯』ゆえにギヤスケルを非難するブロンテ学者は多いが、『生涯』はブロンテがたとえ生きていたとしても、今ある形以外では書きえなかっただろう。一方、ギヤスケル自身も模範的な家庭婦人という側面のみが強調され、作家としてのプロフェッショナルでクリアな瞬間は1990年代の再評価まで見過ごされてきた。

ヴァージニア・ウルフが指摘したように、現実の人生は断片の寄せ集めであり、近代小説のように直線的なプロットをたどらない。現代では、個人は複数のアイデンティティから成る矛盾した存在であることが当然とみなされつつある。伝記、特に優れた芸術家の伝記は直線的なプロットでは描けない。その好例は、ジェンダーや人種の異なる複数の俳優・女優が主人公を演じている、トッド・ヘインズ監督の歌手ボブ・ディランの伝記映画『アム・ノット・ゼア』である。

ギヤスケルも、自分の中にいくつもの「私」がいる自覚を手紙で友人に語った(1859年4月?付)(Chapple and Pollard 108)が、深刻に悩む様子はなかった。ブロンテは複数の「私」の問題を真面目に受けとめた。彼女はギヤスケルに、せわしない家庭生活や社交生活の中で作家としての1人の時間をどう確保するのかと尋ねたが、答えを求めなかった(1853年7月9日付)(Smith 3:182)。複数の「私」を有機的に統一するのが当時の男性作家の規範的な姿だとすれば、作家となる前から妻であり母だったギヤスケルは、複数の「私」が互いに対立し矛盾しても気に留めないクリアな作家だったと言ってもいいかもしれない。

異性愛規範の下では、男たちの物語もありのままに語られたわけではなかった。テイラーの数奇な運命は文通の形では残らず、公的な記録だけが残った(Cory 13-14)。彼は不幸な結婚の後、再びインドに赴き、ボンベイ・ガゼットの編集長などを務め、ボンベイ商工会議所の書記官やボンベイ長官などを歴任し、1874年に怪我が元で死んだ(Smith 2:lIII-IV: “Biographical Note”)。彼の墓に公人としての実物大の厳めしい肖像だけが残るのは示唆的だ。ブロンテの寡夫ニコルズも“the unsung hero of the whole Brontë story”(Cory 14)であり、ブロンテとの愛の手紙が現存しないため、彼のクリアかもしれない私的な声を聞くことはできない。

## 5 結論

以上のように、ギヤスケルとブロンテのテキストと実人生における規範に沿っ

た瞬間と逸脱の瞬間をマッピングして、逸脱の瞬間をクリアな瞬間と呼び、時間や記憶についてのクリア理論を使えば、「結婚と女性の成長」ということでは評価しにくい小説や、性欲過剰や冷感症と批判されるヒロインを持つ小説を、社会的弱者が過去や記憶の操作によってエンパワーメントの機会を得る小説と読み替えることができる。手紙を操作してクリアな瞬間を見えなくした『シャーロット・ブロンテの生涯』は理想的な「女性」作家を構築し、それはブロンテ自身が晩年に構築した自己像でもあったが、現実の手紙やテキストはクリアな瞬間に満ちており、クリアな瞬間は規範的な方法では乗り越えられない不可能を乗り越える可能性を秘めている。個人を有機的で矛盾のない統一体と考える見方では、つねに「偉大な」わけではない個人の、魅惑的で輝かしい可能性に満ちたクリアな瞬間を評価できない。クリアな瞬間と手紙という視点での研究の可能性は大きい。

## 注

本稿は第23回日本ギヤスケル協会大会（2011年10月2日、於江戸川大学）におけるシンポジウム「ギヤスケル文学と手紙」での発表に加筆したものである。

- 1 この手紙は時系列に沿っており、ギヤスケルのこのコメントは無意味である（エリザベス・ギヤスケル『シャーロット・ブロンテの生涯』中岡洋訳 766 第23章の注24）が、ここからテイラー関係の手紙を時間的に操作しようとする意図が読み取れる。
- 2 ギヤスケルは「アメリカに手紙を書く前には、アディソンみたいに（でしたか？）一番いい服を着てダイヤモンドの指輪をはめるべきだと誰でも思うものなのです」（1 Feb 1864）（109）と述べている。

## 引用文献

- Allott, Miriam. *The Brontës: The Critical Heritage*. London: Routledge & Kegan Paul, 1974.
- Barker, Juliet. *The Brontës*. New York: St.Martins Press, 1994.
- T. ベネット、L. グロスバーク、M. モリス『新キーワード事典』ミネルヴァ書房、2011年。

- Brontë, Charlotte. *Shirley*. Oxford: Oxford UP, 1979.
- . *Villette*. Oxford: Oxford UP, 1984.
- Chapple, John A. V. , and Arthur Pollard, eds. *The Letters of Mrs Gaskell*. Manchester: Mandolin, 1997.
- Cory, Charlotte. “Letter from Bombay.” *Times Literary Supplement* 16 Aug. 2002: 13-14.
- Easson, Angus, ed. *Elizabeth Gaskell: The Critical Heritage*. London: Routledge, 1991.
- Gaskell, Elizabeth. “The Gray Woman.” Vol.4 of *The Works of Elizabeth Gaskell*. London: Pickering & Chatto, 2006.
- . *The Life of Charlotte Brontë*. London: Pickering & Chatto, 2006.
- . *Mary Barton: A Tale of Manchester Life*. London: Pickering & Chatto, 2005.
- . *Cranford*. Vol.2 of *The Works of Elizabeth Gaskell*. London: Pickering & Chatto, 2005.
- . *North and South*. London: Pickering & Chatto, 2005.
- エリザベス・ギヤスケル『シャーロット・ブロンテの生涯』中岡洋訳 みすず書房、1995年。
- Halberstam, Judith. *In a Queer Time and Place: Transgender Bodies, Subcultural Lives*. New York: New York UP, 2005.
- トッド・ヘインズ監督『アイム・ノット・ゼア』2007年公開。DVD。ハピネット、2008年。 *I'm not there*. Dir.Todd Heynes.
- Hopkins, A. B. *Elizabeth Gaskell: Her Life and Work*. New York: Octagon Books, 1971.
- Kozaczka, Edward. “Queer Temporality, Spatiality, and Memory in Jane Austen’s *Persuasion*.” *Persuasions-On Line*. 30.1 (Winter 2009) . 7 Feb 2011 <<http://www.jasna.org/persuasions/on-line/vol30no1/kozaczka.html>>
- Love, Heather. *Feeling Backward: Loss and the Politics of Queer History*. Cambridge: Harvard UP, 2007.
- Miller, Lucasta. *The Brontë Myth*. New York: Anchor Books, 2005.
- 中岡洋、芦澤久江編『シャーロット・ブロンテ書簡全集／註解』全3巻。彩流社、2009年。
- Smith, Margaret, ed. *The Letters of Charlotte Brontë*. 3 vols. Oxford: Oxford UP, 1995-2004.

Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. London: Faber and Faber, 1993.

Whitehill, Jane, ed. *Letters of Mrs. Gaskell and Charles Eliot Norton 1855-65*. London: Oxford University Press, 1932. Hildesheim/New York: Georg Olms Verlag, 1973.

(中央大学教授)

## Abstract

# Queer Moments and Letters of Elizabeth Gaskell and Charlotte Brontë

---

Miwa OTA

---

When we map the deviant moments in the lives and the fiction of Elizabeth Gaskell and Charlotte Brontë, call their deviant moments “queer moments” and apply Queer Theory regarding time and memory to their texts, the failure of the text can turn into a challenge. For example, Gaskell’s *North and South* seems to be a failure as a novel of woman and marriage, while Lucy Snowe in Brontë’s *Villette* looks abnormally passionate as well as frigid. In these novels, however, the heroines, deprived of power and confidence, struggle to find a way to empower themselves by controlling the past and its memory in a way that is different from normal and restricted under heteronormativity, although both heroines have heterosexual orientation.

Gaskell’s *The Life of Charlotte Brontë* constructs an ideal feminine novelist, passionless and sexless, which would have pleased Brontë herself, by manipulating letters and making the plot of an obedient daughter and marriage. But the letters and the novels of Gaskell and Brontë are actually filled with queer moments, in which homoerotic relations and transgender behavior help to overcome difficulty under patriarchy or heteronormativity. The traditional view of the individual as a straight and coherent being is too limited to catch the challenging queer moments of the individual, especially a great artist, who is not always great. To focus on the queer moments in letters and novels will open up a fresh reading of the novels which had been difficult to appreciate.

